

平成19年度大台ヶ原自然再生推進計画評価委員会  
 第3回森林生態系保全再生手法検討ワーキンググループ  
 議事概要

◆日時 平成19年12月21日(金) 13:30~16:30

◆場所 環境省近畿地方環境事務所 会議室

◆出席者

<委員>

川瀬 浩	日本野鳥の会奈良支部 支部長
佐久間 大輔	大阪市立自然史博物館 学芸員
高田 研一	高田森林緑地研究所 所長
前田 喜四雄	奈良教育大学教育学部附属自然環境教育センター 教授
松井 淳	奈良教育大学教育学部 教授
村上 興正	元京都大学 講師
横田 岳人	龍谷大学理工学部環境ソリューション工学科 講師

(以上敬称略)

<事務局>

近畿地方環境事務所	田邊 仁	統括自然保護企画官
	高橋 勝志	野生生物課長
	福原 裕	国立公園・保全整備課 自然保護官
	櫻澤 裕樹	国立公園・保全整備課 自然保護官
(株)環境総合テクノス	樋口 高志	環境部リーダー
	保延 香代	環境部リーダー
(財)自然環境研究センター	永津 雅人	第三研究部長
	岸本 年郎	研究員

◆議事

(1) 西大台利用調整地区にかかるモニタリングについて(資料2、2-2、3)

①植生調査について(資料2)

- ・植生調査地点については、わかりやすく設定すること。
- ・植生調査地点については、人の利用による影響を受けている地点だけでなく、人の影響を受けておらず、ポテンシャルが高い(植被率が高い)地点にも設置すべきである。
- ・利用の影響を受けそうでポテンシャルが高い所というのはあまりない。
- ・[事務局] 西大台はミヤコザサに覆われている所以外は被度が低い。ポテンシャルが高い所という意味ではナゴヤ谷が当てはまるが、他所(森林)と異なりオープンランドである。
- ・植被率でみる限りは、人かシカの影響かの判断ができない。組成についても見ていく必要がある。
- ・[事務局] ポテンシャルが高い調査地点として、ウラジロモミやマンネンスギ等が生育するギャップ地の一つポイントを設定することを検討します。
- ・開拓跡付近は歩道がどこなのかわからないので、マナーを訴えるだけでなく、明確に区

別するべき。

- ・〔事務局〕本当にわかりにくい所はロープや杭状の簡易な道標を設置している。
- ・調査地点毎に2ライン（2反復）で調査をしているが、統計処理をする場合には不十分である。最低でも3ラインは必要。
- ・図6のH19結果については、3ヶ所以上で実施していないとバーで表示するのは不適當である。地点を減らしてでも3ヶ所以上で実施すべき。

#### ②植生回復調査について（資料2）

- ・〔事務局〕今回の調査で踏み分け道と呼んでいるのは、ドライブウェイからのショートカットで明らかに人が通ることにより発生した道に限ります。
- ・踏み分け道という言葉はシカが利用しているという誤解を与えるので、使用を抑制した歩道等の呼称を考える必要がある。
- ・〔事務局〕裸地の対照区設置の意味は人の影響かそれ以外の森林全体としての変化なのかを見るために設置している。
- ・現状の調査で裸地が回復しなかった時に利用調整が十分でなかったと結論することは避けたいといけない。人による利用の影響をみるためには、対照区には人もシカも入らない柵などが必要ではないか。
- ・裸地の回復状況を見るだけではなく、裸地の拡大について見ておく必要がある（特に開拓跡など）。
- ・植生がない所（裸地）がどこなのかというデータが必要です。
- ・定点写真のとり方などを工夫して、視覚的に裸地や踏み分け道の回復がわかるようにする方がよい。
- ・〔事務局〕定点写真を増やして対応していくことを検討します。
- ・〔事務局〕調査手法については資料4に計画の修正案を示しています。今後これに加筆修正していきたい。

#### ③希少植物調査について（資料2）

- ・調査対象に大台で注目すべき種はいれないのか。
- ・奈良県版レッドリストが公表されたので、それも考慮すべき。
- ・種によって調査手法を変更すること、指標種を絞ることが必要。
- ・〔事務局〕来年度の春季に調査を実施して、指標種の選定等検討します。

#### ④蘚苔類調査について（資料2-2）

- ・〔事務局〕K1-5については、林分全体の変化を見るために実施している。
- ・マクロの視点から植生調査地点と同じ環境で実施できるように調整すべき。
- ・蘚苔類を指標とする意義について、出現種によって調査地点の乾燥度合の把握が可能です。踏み込みについても回復の早い種、なくなってしまう種など把握可能。また、維管束植物と異なり、コケは岩や倒木上に生育可能なので、森林更新の場として評価できる。降水量の多い大台の環境指標としても重要である。
- ・〔事務局〕協議会の参加者は専門家以外も多数出席するので、なぜコケを指標とするか、

また結果が分かりやすいようにとりまとめていきたい。

⑤ 土壌動物調査について（資料3）

- ・結果は種別にまとめて評価すること。
- ・地点数を増やさないと統計（科学的）データにならない。
- ・指標種を定めて、サンプル数を増やす等省力化して実施すべき。また、指標種の選定、手法の検討にあたっては、専門家にヒアリングを実施すること。
- ・〔事務局〕西大台のモニタリングについては、この結果をもって評価し、次年度の適正化計画に反映させる必要があるので速報値を出して、詳しい解析は次年度以降という流れにしたい。

⑥ 鳥類調査（資料3）

- ・種により人からの影響の受け方が全く異なる。利用者の数ではなく、サイトによる違いに過ぎないのではないか。
- ・天気や時間による要因が大きく、人の影響を評価するのは非常に難しい。実施するのであれば繁殖期にするべき。
- ・今回のデータの処理については、種ごとの生息密度を把握して、種ごとに人の影響を評価した方がよい。
- ・今後のまとめ方については川瀬委員にヒアリングすること。

西大台利用調整地区に係るモニタリング計画（修正案）（資料4）

- ・〔事務局〕本修正案については、本日以降にいただいた意見を反映させた再修正案を森林部会に提示する予定なので、WG後にもそれぞれの請負業者を通してご意見をいただきたい。
- ・計画の期間等については基本的によいが、通常調査と特別（詳細）調査で重みを変えて効率的に実施すべき。

（2）森林生態系保全再生計画の見直しに向けた論点整理について（資料5）

- ・シカの個体群保護管理が言及されていないのは不自然である。
  - ・オープンランドの拡大防止に対してササ刈りはおかしい。森林の回復促進も入れるべき。
  - ・この表現だとオープンランドになってしまった所は何もやらないという感を受ける。
  - ・オープンランドという表現はやめてササ草原とすべき。
- （すべてをササ草原というのにも無理があるので、名称は今後検討）
- ・航空写真を有効に使って、ギャップの状況（新旧）を判断して対策を立てるべき。
  - ・林縁部（疎林的環境）への対策と森林環境への対策に分けて再整理するべき。
  - ・希少種保全の視点からの問題についても検討すべき。
  - ・大きな目標（中期目標）をまず決めて、それから個別具体的な目標（短期目標）を決めていくべき。
  - ・特定の場所（ゾーニング）で何をするというような具体的な目標は短期目標に入れる。
  - ・中期は細かく区分せず大きく区分して、具体的対策は短期でササ刈り、ラス巻きがある

べき。

- ・場所（ゾーン）ごとに方法を変えて実施すべき、もう少し具体化できないか。
- ・「森林環境保全再生を目指す所（森林後退の抑制）」と「草原環境を森林環境へと再生すべき所（森林の復元）」の2つに分けて対策をとるべき。さらに広葉樹林とトウヒ等の針葉樹の違いで区別すべきである。
- ・ゾーニングには沢筋も含めておく。森林、草原、水系など。
- ・大台ヶ原の保全すべき生態系を抽出してまとめるとよい。
- ・[事務局] 斜面方位等のGISデータがあるので、ゾーニング（案）をいくつか作って検討するようにします。

### (3) 動植物モニタリング調査結果の報告について

動物モニタリング調査について（資料8）

- ・テリトリーマッピングについては、新規のルート8を除いて種ごとの全体の合計を出して下さい。
- ・今後のまとめかたについては川瀬委員にヒアリングすること。

#### ◆その他

- ・[事務局] 利用調整の手法（立入り人数等）の変更を検討する必要があるようなモニタリング結果が出ていますか？
- ・西大台のモニタリング調査結果についてはすぐに詳細な評価をする必要はなく、継続することが重要と考えられる。緊急に対策が必要というような結果はでていない。
- ・来年度も利用調整開始前の周知徹底をするように。

[文責 近畿地方環境事務所]